

【小説部門・優秀賞】

天翔ける呼応（あまかけるこおう）

愛知県立岡崎高等学校 第3学年 森田康生

さっきまで聞こえていた風の音が、だんだんと遠くなっていく。見上げる空には、高くそびえ立つ竹がしなり、弧を描くように揺れている。それは、まるで天空の神々が、賑やかな舞を踊っているかのようだった。

「あなたもこの景色を見ていたのですか。」僕は声にならない言葉を、空に向かって投げた。しかし、その答えが返ってくることはない。なぜならその相手は、俵屋宗達その人だったからだ。

夕方のファストフード店は、中高生であふれている。ゲラゲラと笑い声をあげる人。ノートを出してひたすら勉強する人。いつも通り、それぞれの放課後を過ごしていた。

「打它公軌っていう人がさ、発注者らしいじゃん。」
コーラを飲みながら、たくやの目は携帯画面の文字を追っていた。

「ああ、それ調べたけど、風神雷神図屏風を発注したかどうかの根拠資料は見つからなかったよ。」

「このブログの人は、発注者だって言ってるじゃん。」

「俺も最初はその情報を見て、めちゃめちゃ調べたんだよ。打它公軌はさ、糸屋十右衛門で言って、没落した豪商だったらしい。江戸時代の妙光寺再興にあたって、風神雷神図屏風を発注したって言われているけど、宗達には繋がらなかった。」

「まあ、ネットの情報だから、発注者かどうかなんて本当のところわからないよな。」
そう言って、たくやは携帯をタップした。

僕とたくやは高校入学後、すぐに意気投合した。彼は論理的で淡々と話をするので、一見冷たい印象を持たれがちだが、話をしていると、僕の知らないことを教えてくれるだけでなく、一緒に調べて情報を共有してくれる頼もしい男だ。安っぽい知ったかぶりをしないところが、僕は同級生ながらあこがれていた。僕たちはどこにでもいるありふれた高校生だけど、一つだけそうでないことがある。それは、たくやが十万人に一人という確率で発生する難病を抱えていることだ。学校生活は制限が多く、投薬や検査など、病院に通院する時間が生活の半分を占めている。どうしても学校を休まなくてはいけない時があるから、夕方の店内でノートやプリントを見せるのは、僕の日常になっていた。

「たくや、絶対勉強してるだろ。」

中間考査の個別票を見ながら、僕はぼやいた。ノートの持ち主より、たくやはいつも点数が高いのだ。世界史のページを携帯で撮影しているたくやの横顔は、黙ったまま緩んだ。黙っているのが、何よりも肯定している証だ。

「チェッ。」

僕は舌打ちすると、飲みかけのコーラを一口飲んだ。

「病院で待ってる間、暇なんだ。」

「待ってる間で頭に入るのが、信じられないよ。」

「それよりお前、夏休み、調べに行くの？」

「うん。でも、まだ考え中。」

たくやは僕が、俵屋宗達の風神雷神図屏風を追いかけしていることを知る、数少ない人間の内の一人だ。ハンバーガーの包み紙を開いても、かぶりつくことを躊躇していた僕は、昨日調べていた携帯サイトをタップして、たくやに見せた。

「このゴーゴー京都って知ってる？フィールドワークと観光が一緒になってるサービスサイトなんだけど。」

「ああ、知ってるよ。京都だけじゃなくて、全国展開してるよな。日本中の史跡やサブカルチャーを調べて回れるなんて、楽しそうだよな。」

気のせいかと思ったが、一瞬たくやの目が陰ったように見えた。

「相変わらずの情報量だな。」

僕はいつもながら、たくやに感心した。

「俺さ、オンラインコースなら参加できるから、よさそうなのがあったら、見てみようかな？」

とたくやが言ったので、ここぞとばかりに話を続けた。

「じゃあ、一緒にオンラインで参加しようよ。今度さ、京都の…」

「俺、そういうのいらないわ。」

たくやは、静かに僕の話を遮った。

「お前が行きたいと思う場所に、お前が行きたいと思う時に行けばいいじゃん。なんで俺に合わせようとするんだよ。」

僕はしばらく言葉を返せないでいた。

「お前が調べてることって、そんな感じなの？」

たくやは、どんだんかぶせてきた。

「そんな感じって、どういう意味だよ。」

僕は苛立ちながら言い返した。

「一緒につてさ、ただ楽しむだけじゃん。」

「一緒に回る体力がないから、八つ当たりしてるのか？」

売り言葉に買い言葉で、僕は一線を越えてしまった。

「帰るわ。」

たくやは途中まで写したノートをパタンと閉じて、そのまま何も言わず、店を出て行った。遠ざかっていく後ろ姿が窓から見えた。僕は無関心を装いながら、氷が溶けて味のなくなったコーラを飲みほした。

次の日、たくやは学校を休んだ。正直、ほっとした。どんな顔で会えばいいかわからな

かった僕の心配とは逆に、その次の日も、たくやは休んだ。一週間で過ぎた時、担任の先生から、たくやの入院が発表された。僕は携帯でメッセージ画面を開くと、「ごめん」と一言だけ送った。けれど、既読が付かないまま、時間だけは過ぎていった。

夏休みが始まった。僕は以前からこの夏休みを利用して、風神雷神図屏風を調べるため、京都に行く計画を立てていた。事前調べて、俵屋宗達が店を開いていた場所が松原通にあると知ったので、その場所の区画や地形調査、周囲の寺社への取材もしてみたいと考えていた。

「お父さん、今度一人で京都を回りたいと思っているんだけど、いいかな？」

「京都？うん、それはいいけど、例の風神雷神図を調べに行くのか？」

「そうだよ。宗達のお店があった場所に行ってみようと思うんだ。生活していた場所から、何かわかるかもしれないし、現地に住んでいる人から、直接話を聞いてみたいんだよ。」父は真っすぐに僕の目をみて笑った。

「お前、変わったな。」

父の目は、いつもより細くなっていた。よく見ると、目じりにしわと小さなしみができていた。営業職一筋の父は、休みの日でも、お客様の都合に合わせて生活しているため、学校行事も参加できないことが多かった。それでも、家族のために一生懸命働いてくれることは、小さなころから何となくわかっていた。こうやって、何か相談したいことがあるときは、母に伝えてもらうことが多かったが、今回はちょうど家にいたため、直接話をすることにした。

「変わったかどうか、自分じゃわからないよ。」

少し面食らった僕は、テーブルに置いてあった携帯を取り、旅行サイトを開いた。

「宿泊先は旅行会社に頼むのか？」

「うん。ゴーゴー京都っていう観光サービスサイトで頼むことにする。お父さんの許可が必要だから、また書類を準備しておくね。あ、あと軍資金もよろしくお願いします。」

「わかった。気をつけて行ってこいよ。あんまり夜遅くまで出歩くんじゃないぞ。」

「大丈夫だよ。取材は日中しかできないし、一日中歩き回る予定だから、夜まで出歩く体力はなくなってるだろうし。」

自分の体力の話をして、ふとたくやを思い出した。夏休みになって、先生からたくやの様子を教えてもらうこともできず、ずっとモヤモヤしていた。たくやは夏休み、どうしているのだろうか？

京都の夏は、とても暑いと聞いていたけれど、本当に暑くて、普通に歩いているだけでも汗が噴き出してきた。松原通にあった宗達のお店は、今はスーパーマーケットになっていて、その面影は一切無かった。近所のお寺に話を聞いてみたけれど、そんな店があったのかと言われて、取材の仕方を間違えたかもしれないと思い始めた。一通り現地の写真を撮った後、手詰まりになったので、清水寺の風神雷神を見に行くことにした。ちょうどお昼時になり、通り沿いにある飲食店の看板を見ながら立ち並ぶ人が増えてきた。そう言え

ば、朝ごはんを食べてから、まだ何も口にしていない。休憩がてら、茶店で抹茶アイスティーを注文した。

「お待たせしました。」

店員さんから手渡された翡翠色の抹茶は、とても冷たかった。ゴクリと喉に流すと、お茶の香りが鼻から抜けていく。しばらく歩き続けた疲れと共に、京都にいることを実感した。

ふと、道の向かい側に立つ男性の姿が目に入った。町家の細い路地で、じっと巻物のような絵図を見ている。抹茶を飲みながら、ぼんやりとその男性を見ていると、今度は、道路脇の段差を調べ始めた。何をしているのだろうか？僕は旅先で気持ちが大きくなっていったのか、気になって男性に声をかけた。

「あの、すみません。ここで何を調べているのですか？」

「え？あ、えっと、昔のね、関所のような場所、関所ってわかる？」

「あ、はい。出たり入ったりするのに、許可を出す場所ですよ。」

「そうそう、その許可を出していた場所が、この辺りではないかと思ってね、調べているんだよ。」

「その絵が手掛かりなんですか？」

男性は、手に持っている絵を広げて見せてくれた。

「手がかりと言えば手がかりだけど。自分の目で見て、昔の地図から場所を特定していく感じかな。」

見せてもらった絵図には、白い着物を着た人が二人、檻のような場所で座っていた。この人たちは、不治の病に侵され、余儀なく路上生活を送った人だと教えてもらった。

「自分のせいじゃないのに、病気になってしまったため、家からは死んでも同然で追いだされるか、自ら家を出るしかない人たちがいたんだよ。君、学生だよ？何か調べているの？」

「えっと、調べているとまで言えませんが、僕は俵屋宗達の痕跡を追っています。風神雷神図屏風がなぜ描かれたのかが知りたくて。」

限られた人しか明かしていない僕の秘密を、こんなに堂々と話している自分に少し驚いた。

「俵屋宗達か。宗達には角倉素庵という友人がいたことは知っているかい？」

「角倉、素庵？」

「京都の高瀬舟を引いた角倉了以の息子だよ。嵯峨本って聞いたことある？」

「はい、宗達が絵を描いて本阿弥光悦が文字を書いた。」

「そう、その嵯峨本のプロデューサーが角倉素庵。あまり知られていないけれど、宗達からしたら、名前を上げて身を立てることができたのは、角倉素庵のお陰もあったんじゃないのかな？」

「そうなんですか？知らなかったです。あの、あなたは歴史愛好家ですか？」

男性は僕の問いかけに、声をあげて笑った。そして、博物館の学芸員だったが、昨年定年退職したと教えてくれた。僕一人で調べて回っていても、なかなか有益な情報は得られな

かったが、現地での貴重な出会いが嬉しかった。自宅に帰ってから、その男性が教えてくれたことを、ひたすら調べてみると、角倉素庵という人物が、俵屋宗達にとって、かなり影響を与えていたことがわかった。不幸にも病に倒れてしまったが、藤原惺窩を師事し、病にかからなければ、林羅山と比肩するほどの功績を積んだであろう人物だった。この角倉素庵の病は、皮膚が白くなってしまう特徴があつて、僕の疑問だった雷神の白さと、どこかで重なるような気がした。

二学期が始まった。始業式が終わって、提出物や連絡事項で教室がざわついていたとき、担任の先生が大きな声で注目を促した。

「みんな、ちょっと聞いてください。たくや君のことだけど、体調が回復しないので、休学することになりました。みんなも心配だと思うけど、本人も回復次第学校に行きたいと言っているそうなので、連絡先を知っている人は、時々学校の様子を伝えてあげてね。以上です。」

みんな、先生の話をもて聞いていた。話が終わる瞬間、先生と目が合った。なんだか無言のメッセージを受け取ったような気がした。

学校からの帰り道、僕は一人でファストフード店に入った。コーラを一口飲んで、夏休み中に見なかった、たくやとのチャットを開いてみた。すると、以前、僕が送ったコメントに、既読がついていた。その続きに、

「学校で待ってるから」

と送ってみた。すると、今度はすぐに既読がついた。

「悪かったな。心配かけて。」

二ヵ月ぶりに、たくやからメッセージがきた。

「悪いと思ってるのか？」

コメントの後に、『怒った顔』のスタンプを送った。たくやは、

「今度、おごるよ。」

と、『ポテト』と『コーラ』のスタンプを返してきた。

「ノート、たまってるぞ。」

「ノートより、京都の調査結果を読みたいよ。新事実、期待してるから。」

僕が『了解』のスタンプを送ると、既読はついたが、その後は返信がなかった。それが、僕とたくやの最後の会話だった。

たくやの葬儀は身内だけで行われたため、クラスメイトも先生も、見送りはできなかった。四十九日法要が終わった後、僕は許可をもらってお墓に来ていた。井戸水をバケツに注ぎながら、たくやのお母さんが電話で話してくれた最期の様子を思い浮かべていた。

「あの子は、幸せだったと思います。あなたのことばかり話していたわ。元気になったら、今度は一緒に京都を回るって、ずっと言っていたのよ。食事もほとんどできなくなってしまったけれど、コーラだけは飲めたの。亡くなる日もね、コーラを飲んでいたわ。」お母さんは、そう言って泣いていた。

たくやが眠るお寺は、大きなお寺だった。お墓が立ち並ぶ階段を登っていくと、景色が一変し竹藪に入ってしまった。道を間違えたかと思ったが、その先に高台があり、たくさんのお墓が見えた。たぶん、あの中にたくやのお墓がある。そう思って再び歩き出すと、強い風が吹いてきて、バケツに挿していた供花が飛ばされてしまった。僕は急いで供花を取りに行った。今度は飛ばされまいと脇に抱えて立ち上がろうとしたとき、目の前の笹の葉から小さな稲のような穂先が見えた。その瞬間、以前たくやが教えてくれた、竹の花の話思い出した。

「これ、何に見える？」

携帯の写真を見せながら、たくやが聞いてきた。

「何だろう。雑草にしか見えないけど。」

「これさ、竹の花なんだよ。竹の花ってさ、数十年に一度だけ咲くんだって。しかも、竹の花が咲いた後は、その竹藪の竹は、みんな枯れてしまうんだ。」

「え、全部枯れちゃうの？」

「ああ。でも、その花からまた種が飛んでいくから、別の場所で竹が生えるってことじゃないかな。」

あのときに戻れたら…。今ここにいる自分は夢の中にいるんじゃないか。そんな気持ちになった僕の目の前で、竹の花は咲いている。

「たくや、竹の花を見せてくれたの？」

まだ墓前に行っていないのに、涙がこぼれそうになったので、慌てて空を見上げた。すると、青竹と枯れた白い竹が、左右ははっきりと分かれ揺れているのが見えた。遠くの方でかすかに浮かぶ雲が、緑と白の竹を乗せて、空高く連れて行ってしまおうようだった。たくやが逝ってしまったことが悲しくて、とうとう涙があふれ出てきた。滲んだ青空にうっすらと浮かぶ雲と竹を、しばらくじっと見つめていた。

刹那、風神と雷神が現れた。笑っている。生き生きと天空を駆けている。空は金色の原野になった。風の音は遠ざかり、心臓の鼓動が囃子太鼓のように聞こえている。僕は思わずその人に向かって、声にならない声をあげた。

「宗達、あなたもこの景色を見ていたのですか？この空へ、友を見送ったのですか？」竹林の静寂は、沈黙で答えを僕に返した。いつか見たたくやの横顔のように、温かく懐かしい気持ちで、僕は満たされた。

俵屋宗達が、いつ、何の目的で風神雷神図屏風を描いたのか、未だ解き明かされていない。初めて見た時からその理由を知りたいと思いつけている白い★・・・★雷神は、僕の中で、宗達の友、角倉素庵と重なる。病に体の自由と家族との暮らしを奪われた素庵が、最期まで自分の学問を遂げたことを、先人の史料で知ったからだ。打ち込めるものを見つけた人は、人生の長さではなく、深さでその価値を創っていく。そんな友の姿を見て、俵屋宗達もまた、芸術の世界を極めたのだろう。

「宗達がこの景色を見ていたかどうか、時間はかかると思うけど、調べてみるよ。」

たくやの墓前で、僕は約束した。竹の花は白くなって枯れてしまうけれど、また新しい場所で命を繋ぎ歴史をつくる。たくやが残してくれたもの。それはかけがえのないリアルな対話と探求心だった。

三学期の学年末考査が終わった。担任面接を終えた僕は、成績票を受け取ると、久しぶりにファストフード店に立ち寄った。最近、学校が終わるとそのまま塾に行くことが多くなっていた。変わらない喧騒の中、コーラを飲みながらオープンキャンパスの画面を見ていると、

「なんだよお前、俺より点数いいじゃん。こっそり勉強しただろ。」

テーブルに置いてあった僕の成績票を見て、後から来たクラスメイトが声をかけてきた。

「やりたいことがあるからさ。今は勉強するしかないよ。」

「やりたいことって、何？」

「昔の人の考えを知ること。」

鞆の中で、携帯がブルブルと震えた。手に取ると、待ち受け画面が塾の講義開始十五分前を告げている。

「そろそろ時間だね。」

「え、もうそんな時間か。」

迷うことなくハンバーガーを口に詰め込み、僕たちは店を出た。塾へ続く坂道の空は、群青色に変わり始めていた。